

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 7 日現在

機関番号：24506

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21500716

研究課題名（和文） 準限界集落の高齢者生活を支える“家族を超えた「家族的関係」”の模索と創造

研究課題名（英文） The “Family” Relationships beyond Households in Depopulating and Aging Villages for the Elderly

研究代表者

佐藤 宏子（SATO HIROKO）

兵庫県立大学・環境人間学部・教授

研究者番号：60165818

研究成果の概要（和文）：

静岡県藤枝市岡部町朝比奈地域の青羽根集落・日向集落は、過疎化と農業従事者の高齢化が進む海拔 500 メートルの中山間地域である。本集落では、高齢農業者が「より高い品質のお茶をつくる」という「共通の目標」・「競争意識」・「緊張感」により集落の「共同性」を維持し、栽培技術の開発や製茶工程の高度化を図ることで、わが国有数の高級茶を生産している。後継者の他出や農業者の高齢化により「手間」が不足した世帯は、農作業の日常的援助や製茶工場における共同製茶によって集落全体でフォローされている。

研究成果の概要（英文）：

Aohane Village and Hinata Village are located in Asahina district, Okabe town, Fujieda City in Shizuoka prefecture. The villages are in a mountainous area and are facing depopulation and aging of the local farmers. However, these villages have the production of the best green tea in Japan. The elder farmers of these villages produce green tea with the “same goal to produce green tea of best quality”. They also share “the awareness of the competition of tea quality” and “the spirit of the best tea producers”. The villages have the function of “giving aids” and a tea making factory that is available to all qualified farmers. These systems play an important role in supporting the households lacking “sufficient workforce”.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：生活科学・生活科学一般

キーワード：高齢者生活

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 過疎化、高齢化の進行で、総務省が過疎地域に指定する市町村は 732(2008 年 10 月)にのぼり、中山間地域や離島を中心に限界集

落や準限界集落が急速に増えている。一般に、こうした中山間地域では、後継ぎの確保が難しく、高齢者夫婦世帯、高齢者独居世帯の比率が非常に高く、横行生産活動や共同体の機

能を次世代に受け継ぐことが困難になっている。

(2) わが国における最高級茶の生産地である静岡県藤枝市岡部町朝比奈地域では、1982年からの30年間にわたる追跡研究により、過疎化・高齢化、農業不振に伴う急激な世帯変動、世代間関係の変化、直系家族規範に基づく老後意識の変化が明らかになっている。

(3) 朝比奈地域の最も北部に位置する海拔500メートルの青羽根集落および日向集落では、過疎化、農業就業人口の高齢化が急速に進む中で、「住み慣れた青羽根・日向の集落に住み続けたい」という願いを持ち続け、高齢者たちが静岡県下で最高単価額の高品質の茶を生産し続けている。

## 2. 研究の目的

(1) 現在の農業労働や生活環境が、高齢者のライフスタイルにどのような変化をもたらし、高齢期のQOLにどのような影響を及ぼしているのかを明らかにする。

(2) 過疎化、農業就業人口の高齢化が急速に進む中で、住民たちが「集落はひとつの『家族』のようなもの」と表現している「共同性」や住民たちの「助け合い」の実態、可能性、限界について明らかにする。

## 3. 研究の方法

2009年5月～2012年1月の間に、朝比奈地域の青羽根集落および日向集落の65歳～87歳の男女27人を調査対象者とする訪問面調査を実施した。また、青羽根公民館における青羽根集落住民の座談会、日向集落の製茶工場「たくみ工場」における日向集落住民の座談会、青羽根集落と日向集落の氏神様である大井神社の祭礼の視察とインタビュー調査を実施し、調査結果を分析、考察した。

## 4. 研究成果

### (1) 高齢者のライフスタイルの変化

①1970～80年代の親世代のライフスタイル  
対象者の親世代は、1970年代、80年代に高齢期を迎えた。彼らは、55歳をすぎると徐々に農業から引退し、60歳になると完全に引退して老人クラブに入った。長寿となった親世代は、年金を経済的基盤・お小遣いとして、80代、90代まで「農業引退後のライフステージ」を楽しんだ。

・「親はわたしらの年齢のときには、とっくに農業は若い衆に任せて、毎日ゲートボールやってたね。私らお嫁さんは車の免許を取って、お父さんやお母さんを毎日代わり番こでゲートボール場や試合の場所に送

って行ったよね。どこまでも行ったね。」

- ・「年寄り衆は年金もらおうと働かなくても自分のお金がもらえるから、毎日遊んで通ったね。年金で自分のやりたいこととして、老人クラブの旅行によく行ったよ。」
- ・「年寄り衆は、ゲートボールに出るようになって変わったよねえ。ゲートボールが楽しみになって、1日おきに練習してた。お仕事だったもんね。お茶時になるとよその家に行ってお茶刈りを手伝って楽しんでたね。忙しいからちっとはうちを手伝ってもらいたいんだけど、年寄りはぜんぜん戦力にならなかったよ。ご飯の支度も嫁の仕事だしね。年寄りには一番いい時代だったよね。」

### ②現在の高齢者のライフスタイル

農業従事者の高齢化が進んでいること、後継者がいない世帯が増加していることから、高齢になっても農業から引退することができず、親世代がゲートボール、旅行、趣味などを楽しんだ「農業引退後のライフステージ」を経験できない者が増えている。忙しい農作業の傍ら趣味活動、友人との親密な交流を楽しむ余裕をもつ者はごく少数である。生涯現役である多くの対象者たちは、80歳を過ぎても緊張感をもって茶生産を続けている。しかも、近年、茶栽培や製造技術の進歩によって農作業が高度化しており、年々進化する最先端の栽培技術を習得し、手間をかけて最高級茶の栽培を続けていくことが、高齢者にとって大きな負担となっている。多くの農業者が80歳をすぎて健康に不安を感じたり、健康を害したりしていても、体が動く限りは医者通いしながら車を運転し農業を続けている。このため、農機具による事故や農業用軽トラックの転落事故が多い。老人クラブは活動を停止し、敬老会も成り立たなくなっている。

- ・「今は若い衆が農業やらないから、いつまでもあたしらが現役。年寄りの介護もしなけりゃならない。」
- ・「今は忙しくてゲートボールなんてやっちゃあいられない。誰もグラウンドを使う人がいないもんだで、立派なグラウンドが草だらけになってる。」
- ・「今は老人クラブどころじゃねえな。敬老会も行っちゃあいられない。敬老会は出席者が少なくてね。みんな仕事してから行けないだよ。今、みんなが老人クラブに出たら、お茶は作れなくなっちゃう。だから、老人クラブはもうなくなっちゃった。」
- ・「今は歳とっちゃいられない時代だよ。現役の緊張感が80になってもある。なもんだから、体に負担かけるんだよ。40代と同じことやってるんだもん。やれるわけない

んだよ。だから手が痛くなったり、足が痛くなったりしてくるんだよ。」

- ・「1年、1年自分の体が大変になってきた。80 すぎても車運転しなけりゃ茶ばら行って仕事できないし、病院にも行けない。シシは茶ばらを掘るから足をとられてくじいたりするし、危ないことばっかだよ。」
- ・「年寄りがみんな老人クラブへ行く暇もゲートボールする暇もなく、現役でお茶を作っている。そんで、家の中でゲームやってる孫っちがいる。いっしょに住んでるって言ったて、すごい違う世界だよ。」

## (2) 50 年間に起きた家族関係の激変

### ①「嫁」の「存在」の変化－(60 年代)－

対象者の多くが、昭和 45 年から 50 年頃までの間に自動車学校に通って車の免許証を取得した。車を運転する「嫁」の出現である。車の免許証取得は、「嫁」たちの生活を変えたばかりでなく、親と「嫁」との力関係を大きく変化させた。当時、ゲートボールが非常に盛んであったが、毎朝お嫁さんが車で練習会場・試合会場に送ってくれなければ、親たちはゲートボール場に行くことができなかった。また、中山間地域に住む人々にとって、車は買い物、通院、子どもの送り迎えなどに欠かせない生活手段である。車の免許を取得した嫁は、姑は持たない「自由」を獲得し、生活圏を大幅に広げていった。また、高齢となった今日も車を運転できることが、対象者たちの生活者としての自立の基盤であり、旅行やドライブ、買い物、趣味活動や社会活動の交通手段となっている。

- ・「今、自分の財産は運転免許証だけだよ。車運転できなかつたら、まるで用が足せない。買い物にも病院にも行きたいところにも行けない。免許持ってるから自由があるんだよ。」

### ②夫婦の共同性の高まりと夫婦関係の変化－電動茶刈り機「ふたり刈り」の導入(70 年代後半～80 年代前半)－

70 年代までの「手刈り」時代は、昼間女性が手鋏みでお茶摘みし、男性は女性が刈った茶葉を小規模の共同製茶工場で揉んでいた。茶畑への行き帰りも、女性は子どもを連れお弁当を持って皆のうしろから追いかけるように歩いて行った。専業農家といっても作業が男と女で分かれていたので、朝 6 時から夕方 6 時まで夫婦が一緒にいることはほとんどなかった。80 年代の初めに茶の木を改植し、電動の「ふたり刈り」を導入した。「ふたり刈り」による茶刈りは、茶の木をはさんで機械の両端をふたりで持って行うため、持ち手の高さ・進む速度・傾斜角度など、相手との呼吸がぴったり合わないと上手く刈ることができない。導入当時は、微妙な加減や相手

の調子が分からず、茶畑で夫婦げんかが頻繁に発生し、「ふたり刈り」は「ケンカ機」と呼ばれた。「ふたり刈り」の導入によって、茶葉の収量が飛躍的に増えたと同時に、夫婦と一緒に農作業すること、夫婦が対等な立場でケンカし、我慢し、相手に合わせることによって夫婦の共同性が高まった。また、車で夫婦と一緒に移動することも、夫婦のコミュニケーション量を大幅に増やした。

- ・「作業が機械化したり車を使うようになって、夫婦で一緒に移動する、一緒に仕事する、夫婦で話しすることが増えました。嬉しかったですよ。いつも一緒にいるし、見ているでしょ。「いいお茶作ろう」って共通目標があって、ふたりでいつも同じ方向を向いているんですよ。」
- ・「お茶はひとりじゃやれない。夫婦が元気がないと機械持てないし、肥料だって、消毒だってひとりでじゃできない。夫婦どっちかができなくなったら、お茶は終わりにするしかないよ。」

## (3) 集落の共同性を支える“家族を超えた「家族的関係」”

### ①「共通の目標」「競争意識」「緊張感」

集落の共同性は、「より品質の高いお茶をつくる」という「共通の目標」「競争意識」「緊張感」によって保たれていることが明らかになった。高品質の茶は、良質の茶葉の栽培と高度な製茶技術によってつくられる。青羽根集落、日向集落は海拔 400～500 メートルにあり、昼と夜の温度差が大きく霧がかかるといふ地理的条件・気象条件に恵まれ、良質の茶葉を栽培することが可能である。しかし、海拔が高いため、発芽時期が遅く、問屋が他の地域からの新茶で飽和状態になった頃に出荷時期となるため、価格を上げるためには付加価値を付ける工夫が求められる。2000 年に製茶工場「たくみ工場」が本地域に建設されるまでは、5～7 軒が共同で小さな製茶工場を所有し、女性たちが収穫した茶葉を男性たちが順番を決めて揉んでいた。製茶は重労働であると同時に「茶葉を生かすも殺すも製茶しだい」と言われる難しい工程であった。

青羽根・日向の 2 つの集落 22 戸は、茶生産の将来を見据え、零細の製茶工場を廃止し、共同で出資して「たくみ工場」を建設した。県の補助金を得るために、集落のリーダーは衆議院議員や県の市町村課などを説得して回り、2000 年、ついに「過疎の山奥」に県下初の最新鋭設備を備えた製茶工場「たくみ」が誕生した。「たくみ工場」では、刈り取られたばかりの茶葉の状態や当日の気温や湿度などに合わせて、経験豊かな組合員が各工程を制御する最新鋭のコンピューターに数

値を打ち込み、製茶工程を細かく設定している。ただし、高品質の茶を共同で製茶するため、工場に持ち込まれるすべての生葉の品質が高く、しかも均質であることが求められる。そこで、青羽根集落、日向集落における茶栽培は、肥料や消毒の種類・面積当たりの量・回数・時期、栽培方法、手入れ方法などが細かく統一管理され、役員が組合員の畑を巡回し、作業状況をチェックし指導している。また、高品質の茶を栽培する方法は、問屋と共同研究し、玉露栽培を簡略化した「トンネル栽培」を3年前に開発した。さらに、「たくみ工場」の1日の製茶量は最大11トンである。このため収穫した生葉をすぐに製茶できるよう、最盛期の10日間は世帯別の1日当たりの収穫量が前年の収穫量に応じて割り当てられている。刈り取られ「たくみ工場」に持ち込まれた生葉は、その場で分析機にかけられ品質が点数化され評価される。品質の低い生葉は、共同製茶のラインからははずされ別揉みになる。現在、「たくみ工場」で製茶された茶は、2つの問屋の契約栽培となっており、静岡県下で最高単価額である。問屋からは、収量を増やして欲しいとの強い要望があるが、高齢者による栽培には限界がある。また、「たくみ工場」建設のための借金は、2010年までの10年間で返済が終わっている。

- ・「お茶の恩恵でこの集落はみんな暮らしているんだよ。みんなで良いお茶を作るっていう共通の目標と競争意識があることがいいだね。」
- ・「みんながよいお茶を作ろうと思っていることが、この地域のモラル、まとまりとなって、生活全体を支えていると思う。」
- ・「たくみ工場にへんな生葉を持って行かないだよ。分析機ですぐデータがでちゃうからごまかせないよ。恥ずかしいもんで真剣になるだよ。みんな競争でやるから、それだけでいいよね。いいもんをみんなで作れば、最後は高い金額で売れるわけだから、みんなで喜びも共有できるんだよ。そういうことが、何よりこの集落のまとまりになってると思うよ。」
- ・「みんな長年お茶を作っているから、手抜きしてると茶畑の横を歩いて一目見れば分かっちゃう。よっぽどしっかりやらんと見苦しくてね。一生懸命やらざるを得ないよ。製茶のとき、おぞいお茶（品質の低いお茶）が1軒でも入ると、全体のランクを下げて、単価が安くなっちゃう。恥ずかしいし、みんなに迷惑かけるよ。」
- ・「たくみ工場に葉を持ってくるからには、このレベルのお茶でなければダメでしている。工場として品質が下がらないような努力を厳しくしていることが、みんなの気持ちをひとつにしているんですよ。みんなが一生懸命いいお茶を作ろうとするからね。」

ながら一生懸命いいお茶を作ろうとするからね。」

- ・「良いお茶をつくる力が、この地域を支えてくれて、みんな暮らしているんだよ。」

## ②共同性に基づく日常的援助

各世帯の「手間」には、後継者がおり親世代とともに茶栽培を行う世帯、後継者が他出または雇用労働者となっており老夫婦だけで茶栽培を行う世帯、老夫婦のいずれかが病気のため高齢者ひとりで茶を栽培し、子どもや親戚が不定期で手伝いに来る世帯など、大きな格差が認められる。茶栽培の作業や品質管理は各世帯が独立して行っているが、次のような農作業の日常的援助が行われている。

- ・「肥料やるとき、4月のはじめに寒冷紗を掛けるとき、5月のお茶を刈ったり運んだりするときとか、自分のところは全部終わったのに遅れて終わらないうちがあるでしょ。そうすると終わった人たちがみんな手伝いに行って終わらしてやる。みんなで行って刈って運んだりね。」
- ・「うちは息子がやってるから手間があるでしょ。よその遅くなつたうちに手伝いに行くですよ。毎年よくあることだよ。こういう所じゃあ、そういう気持ちがないとだめだね。」
- ・「肥料だって消毒だって何だって、仕事はみんな一斉にやるでしょ。そうすると遅れて終わらないうちが1軒とか2軒とか残るの。「あのうちはまだだ」って分かるから、みんなで助けるよ。」
- ・「風が強いと畑に掛けた寒冷紗が取れて飛んでしまうよ。そうすると「外れてるよ」って電話かけてやるの。みんなの電話番号は大体全部覚えているからね。お互いそうやってしっかり見て助けるの。表面的な助け合いじゃないのよ。」
- ・「ちいちゃな部落でお互いしがらみ合って毎日生活して、お茶つくっているんだもんね。やっぱみんな何て言うか、心が分かっているの。仲間の意識があるの。だから助け合いっているのは結構あるよ。困っているときは、みんなで助けてくれるからね。」

## ③共同製茶による援助とその限界

老夫婦のいずれかが病気となったり高齢になつたりして農作業ができなくなると時折子どもや親戚が手伝いに来るが、日常的に高齢者ひとりで茶栽培を行う世帯は、「たくみ工場」で行う製茶工程に労働力を提供しなくても、茶刈りをして生葉を工場に持ってさえ行けば、他の組合員に製茶してもらえ、他の組合員世帯と同じ単価額の収入を得ることができる。すなわち、農業従事者の高齢化

により「手間」が足りなくなった世帯を集落全体でフォローするシステムが機能している。今日の状況下で、製茶を個人単位で行うということは現実的に不可能であり、「手間」がなくなった世帯は、本システムによって茶生産の継続、収入獲得が可能になっている。

しかし、集落全体でフォローする本システムにも限界があることが徐々に見えはじめている。まず第1に、地域全体の高齢化が進むことによって集落全体でフォローしなければならない世帯数が急増することが明らかである。第2に、フォローしている世帯の収穫する茶葉の品質が落ちてきていることがあげられる。「たくみ工場」で製茶する生葉の品質基準は厳格に設定されているため、茶葉の品質が落ちると「たくみ工場」の共同製茶工程に生葉を入れることができなくなり、結果的に集落としての茶生産のフォロー・システムからはずれることにならざるを得ない。

(4) 将来の茶生産と集落を支える「先見性」と「指先のセンサー」を持つ次世代たち

現在 70 代、80 代の茶生産者たちは、1970 年代、80 年代の茶の大量生産・最盛期から後継者難と茶生産の縮小期までを経験し、2000 年以降「生き残り」をかけて、「たくみ工場」建設、高級品質茶の栽培・生葉管理・製茶の製造工程を 1 つ 1 つ試行錯誤し、創り上げてきた「茶葉の巧みたち」である。彼らは、高級志向が今後一層高まると予想し、次のように語っている。

・「これからもいろいろ変わっていくだろうよ。でも、いいものを作っていけば大丈夫。そのためには、時代を先取りしにゃあだめ。人のやるもんをやったじゃあだめ。重要なのは「先見性」だよ。人のつくりえないものを作る力がないとだめだよ。」

・「製茶の製造工程は機械が良くなったから、ものすごい楽になった。機械の精度が良くなったから理想的な製茶ができる。でも、機械の精度が良くなった分、機械を上手く使いこなせるように人間も精度よくならにゃあだめなんだよ。「指先のセンサー」を磨かんとコンピュータを動かさないんだよ。」

・「青羽根集落には、40 代、50 代で生産も製造も生葉管理も上手っていう人が 6、7 人いるよ。若いときからお茶作りして、先輩たちの製造を見てきた若い人たちには「指先のセンサー」があるからね。この人たちは、最新鋭のコンピューターを動かす能力があるし、いいお茶作ろうっていう意識がものすごく高いよ。だから、私らがいなくなっても、あと 20 年は大丈夫だよ。私らの後継者たちは頑張ると思うよ。問題はその次の世代だな。」

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

- ① 佐藤宏子、農村有配偶女性のライフコースの変容—ライフ・イベントと職業経歴のコーホート分析、兵庫県立大学環境人間学部研究報告、査読有、Vol.13、2011、pp.9-19
- ② Hiroko Sato, Change and the Situations of the Japanese Family Facings a Super-aging Society –With a Focus on the Trends of the Baby Boom Generation-, Journal of Family Relations, Korea Association of Family Relation, 2011, 3-17, 査読有

〔学会発表〕(計 5 件)

- ① 佐藤宏子、農村女性のライフコースと家族変動—23 年間の追跡研究から—、日本老年社会科学会第 51 回大会、2009.6、パシフィコ横浜(神奈川県)、日本老年社会科学、Vol.31, No.2, 219.
- ② 佐藤宏子、農業の衰退・地域社会の変質と「家」的家族規範・意識・関係の変化、テーマセッション：ライフコースと社会変動—アジアの 20~21 世紀再考、第 82 回日本社会学会、2009.10、立教大学(東京)、報告要旨集 293.
- ③ 佐藤宏子、超高齢社会を迎える日本家族の諸相と老後生活に関する意識の変容、The Congress of Korea Family Relation The Meeting of The Korea Association, 2010.11.5、韓国ソウル市梨花女子大学(韓国家族関係学会講演集、2011、32-38).
- ④ 佐藤宏子、東アジアの社会保障制度構築に果たすインフォーマルセクターと公的福祉の相互関係、兵庫県立大学研究発表会、2012.1.25、兵庫県立大学・三木記念館(兵庫県)
- ⑤ 佐藤宏子、長寿社会の課題と新たなつながりの模索—アジア儒教文化圏における家族・地域の変容と高齢者の Well-being—、家庭科教育研究者連盟研究会、2012.3.24、静岡コンベンション・アーツセンター(静岡県)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.u-hyogo.ac.jp/shse/sato/index.html>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 宏子 (Sato Hiroko)  
兵庫県立大学・環境人間学部・教授  
研究者番号：60165818

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし